

### 第三 戦闘経過の概要

A、軍主力方面の戦闘（別紙要圖第四、第五、第六参照）

其の一 上陸準備砲爆撃（自昭和二十年三月二十三日）

至同年三月三十一日

一、敵は三月二十三日早朝より其の機動艦隊の空軍主力を以て沖繩島一部を以て南西諸島の各島嶼に來襲次で翌二十四日より戦艦重巡各十餘隻を基幹とする大艦隊を以て沖繩島を包繞し艦砲射撃を開始せり

敵の上陸準備砲爆撃は艦載機延一日千機大型艦砲發射彈一日數千乃至三萬發（我が軍の概算せるものにして逐日増大せり）の規模を以て實施せられ其の目標は飛行場、船舶港灣次で重要な中南部沿岸防禦施設に及べり

古今未曾有の大規模なる砲爆撃により全島噴火山の如き凄愴なる光景を呈するに至りしかもかねて斯くあるを期し心血を注ぎて構築せる洞窟築城に據る我が軍は損害輕微にして志氣愈々昂り闘志益々熾んなり

二敵は沖繩本島に對し上陸準備砲爆撃を實施するの間三月二十六日慶良間群島中の座間味、阿嘉、渡嘉敷の三島に上陸次で三十一日慶伊勢列島中の神山島を占領せり  
慶良間群島に在りし海上挺身第一乃至第三戰隊は一部の外海上出撃の遑なく之を陸上に邀へて戦闘し二十七日迄には軍司令部との通信連絡逐次杜絶し遇々同群島を巡視中なりし船舶團長以下諸隊は概ね玉碎せしものと信ぜられたり  
神山島に上陸せる敵は十<sup>〇</sup>級長射程砲七、八門を展開し連日連夜豊富なる彈藥を以て我主陣地帯内部に對し主として交通遮斷射撃を加へ我軍の行動を妨害せり  
三軍は三月二十七日には敵艦隊の配置、輸送船團の位置上陸準備砲爆撃の重點慶良間群島及神山島の占領其の他諸般の戰術的判斷よりして敵が沖繩本島中南部西岸特に嘉手納方面に上陸すべしとの確信を有するに至れり  
沖繩島南岸湊川正面に對する敵の策動を算大なりとは考察せるも

か亦頻りにして敵從未一息上陸戰志に鑑み牽制陽動の

敵の有力なる一部が上陸することなしとは斷定し得ず又若し萬一上陸し來る場合には直接軍の心臓部を衝かれ致命傷を受くる虞あり  
敵が主力を以て嘉手納正面一部を以て湊川正面より上陸する場合敵主力が我が前進部隊の抵抗を排除しつつ南下し我が主陣地帯に對し本格的攻撃を開始する迄には最少限十日を要すべく萬一敵の一部が其の主力に策應し湊川正面を上陸し來たらんか此の期間内こそ之を各個に撃滅すべき好機なり  
依て軍は北方陸正面の防備を嚴ならしむると共に南方湊川正面に上陸する敵を各個に撃滅する方針の下に概要左の如く部署せり  
一混成旅團は湊川正面の配備を更に強化す  
二第二十四師團は概ね現態勢の儘平素計畫するところに基き隨時湊川正面に攻勢に轉じ得る如く準備す  
三軍砲兵隊は左記部隊を湊川正面に轉移すると共に平素計畫するところに基き橋頭堡破摧射撃を準備す

獨立迫撃第一大隊 兩大隊共に砲は半數(二十四門)宛携行し他の半數  
同 第二大隊 は所要の人員を附し舊陣地に殘置す

獨立臼砲第一聯隊の一中隊

以上一部兵力部署の變更は一見敵の牽制陽動に乗ぜられたるか  
の如き觀あるも其の兵力移動は極く一部にして北方への兵力轉  
歸は狀況に合する如く隨時容易に實行し得るものなり

四敵の上陸準備砲爆撃間軍は豫ねての方針に基き一切の敵の偵察陽  
動的挑戦行動に對し嚴として應戰することなく以て我が戰略術上  
の配置及企圖を秘匿すると共に過早の損害を回避せり  
敵側の放送に於て日本軍は沿岸戦闘に於て頗る消極的なりとのこ  
とありしも是我が軍の遠謀深慮を察せざるの言なり  
但し我が軍首脳部に於ても大方針を忘れ血氣の勇に逸らんとす  
るものあり

是等の者を慰撫する意味をも兼ねて戰車第二十七聯隊の九〇野砲  
を以て機動狙撃隊を編成し沿岸近く暴進し來たる敵小艦艇に對し

反撃を加ふる如く處置せり

其の二 前進部隊の戦闘 (自四月一日  
至四月五日)

四月一日

敵は早朝來嘉手納海岸に對し徹底せる最後の準備砲爆撃を實施し  
たる後〇九〇〇大型舟艇一五〇隻、小型舟艇六〇隻を以て北は殘  
波岬より南北谷海岸に亘り上陸を開始す

首里山上より望見すれば北、中飛行場正面一帶砲爆の塵煙火光地  
を掩ひ天に沖し光景壯絶を極め數百隻の敵艦船は沖繩島の西岸よ  
り本部半島慶良間群島に亘る廣大なる海面を壓して密集す  
斯くて敵は一四〇〇北谷、佐久川、中飛行場北飛行場の線次で夕  
刻には北谷、吳富士、屋良、伊良皆、座喜味の線に進出す  
敵上陸正面に在りし特設第一聯隊は北、中飛行場の諸施設を破壊  
した後二二〇高地第二十四師團の舊陣地に據り抵抗せんとせしも  
臨編島合の部隊にして態勢の整理至難なり  
又第六十二師團の前進部隊たる賀谷支隊主力は島袋附近の陣地に



在り警戒部隊として嘉手納海岸に配置しありし同支隊の微弱一中隊は平時よりの軍の規定に基き特設第一聯隊長の指揮下に入り戦鬪中なるものの如し

敵が軍の最希望する島尻沿岸に上陸せざりしは遺憾なるも今回の敵上陸方面は算最大なりとして平時より軍の豫期せんところなるを以て軍司令官以下全軍沈著冷靜餘裕綽々たるものあり

四月二日

軍は急速に地歩が擴大しつつある敵軍に對し特設第一聯隊をして極力反撃を續行せしむると共に通信連絡の杜絶を顧慮し之を國頭支隊長の指揮下に入らしめたり

四月三、四日

敵は賀谷支隊を壓迫しつつ南下し漸次我が主陣地帯に近接す  
四日正午頃敵の第一線は萩道、屋宜原、宜野灣北側、大山の線に賀谷支隊主力は大城、普天間の線に在り  
特設第一聯隊とは通信斷絶し狀況不明なり

陸軍

四月五日

賀谷支隊は主陣地帯内に後退し幸地附近に兵力を集結す  
現在迄に支隊の敵に與へし損害約一千支隊の死傷數百なり

軍は北正面に於ける彼我主力の戦鬪方に開始せられんとし且湊川正面に於ける敵の策動は牽制陽動の範圍を出でざるを確認し一時湊川正面に増加せん部隊を北方に復歸する如く命令せり

其の三 敵の本格的攻撃開始迄の戦鬪(自四月五日至四月十八日)

敵は嘉手納沿岸上陸後海兵第三軍團を以て國頭方面を掃蕩すると共に第二十四軍團を以て賀谷支隊を壓迫南下せり當時敵は我が軍の企圖配置を察知しあらず賀谷支隊の追撃の餘勢を以て我が主陣地帯へ殺到し頑強なる我が抵抗に會し茲に初めて我が軍の企圖を確認し四月九日頃より約十日間我に局部的攻撃を加へつつ本格的攻撃を準備せり津堅島守備隊に

此の間伊江島及本部半島に在りし國頭支隊主力は相次いで守を失ひ軍司令部に在りては決戦攻勢戦略持久の兩論對立し一時四月八日總

攻勢に決せしも之を變更し四月十二日夜一部兵力に依る夜襲を以て敵に一撃を加ふるに止め一般方針は戦略持久に落著せり  
四月六日

敵は南下の餘勢を驅つて我が主陣地帯の前縁たる和宇慶、南上原我如古八五高地牧港の線に殺到し彼我の間に本格的戦闘展開するに至れり

津堅島守備隊は〇二三三同島に上陸せる微弱なる敵と交戦七日拂曉迄に之を撃退せり

昭和二十年初頭以來中央部と軍との間に問題となりありし決戦攻勢か戦略かの論争は「軍主力を以て速かに北、中飛行場地區に出撃せよ」との大本營及第十方面軍の訓電到着するに及び冷厳なる軍の運命を決する現實の問題となり緊迫せる空氣軍司令部内を支配せり

軍は平素より戦略持久の方針に基き決戦攻勢は全然準備しあらざりしも中央部の意圖に副ふ如く一時全力出撃に決し夫々準備する

ところあり

機密作戦日誌

一高級參謀は過去六ヶ月以上不眠不休の努力せし作戦準備を今種々に一擲し……出撃するも比較を絶して優勢なる敵陸海空軍の爲に島尻、中頭兩郡連接部の狹隘地域に於て全軍數日を出でずして潰滅すべきこと明瞭なり到底大本營の希望する敵を撃破し若くは北、中飛行場を長期に亘り席捲せんとするが如きは得て望むべからず況んや敵の主力が既に上陸を完了し態勢概ね整へりと判断せらるる今日に於て攻勢成功の算愈々絶無なり宜しく平素の方針に基き戦略持久の態勢を堅持し北、中飛行場の制扼は既定の計畫（主陣地帯内の長射程砲に依れば一兵も損することなく主力出撃の場合より一層長期に亘り制扼し得べし）に據るべきなりと強硬に主張せり  
各幕僚は戦勝を夢み或は單に北、中飛行場の價值判断にのみ眩惑し全員攻勢を主張す

軍司令官、參謀長の眞意は素より窺知し難しと雖も全力攻勢に決心せられたり恐らく大本營及第十方面軍の訓電が頗る強硬にして殆ど宿命的に依り理論を超越し攻勢に決せられたるならん  
三軍司令官の決心に基く軍攻撃計畫の概要左の如し

方針

軍は四月八日夜全力を擧げて攻勢に轉じ上陸せる敵を撃滅し標高二二〇高地東西の線に進出す

兵團部署の概要

1. 第六十二師團は四月八日夜全力を擧げて攻勢に轉じ敵を紛戦に導きつつ先ず島袋東南の線に進出す  
爾後の行動は状況に依るも爲し得る限り一舉に北、中飛行場方面に攻勢前進することを豫期す
2. 第二十四師團は第二線兵團とす  
四月八日夜半迄に第六十二師團の後方近く兵力を推進集結し其の攻撃前進に伴ひ之に續行す

第六十二師團島袋東西の線に進出するや其の右翼を超越し標高二二〇高地以東の地區に攻撃前進を豫定す

3. 獨立混成第四十四旅團は第三線兵團とす

四月八日拂曉迄に現在地附近に於て隨時第二十四師團に續行し得る如く態勢を整ふ

4. 海軍陸戰隊は第四線兵團とす

四月九日拂曉迄に現着地附近に於て隨時獨立混成旅團に續行し得る如く態勢を整ふ

5. 軍砲兵隊は先ず第六十二師團の戦團に協同しつつ逐次島袋附近に陣地を推進し兩師團の中頭地區に於ける戦團に協同し得る如く準備す

6. 軍司令官は第一線兵團の前進に伴ひ仲間高地に前進す

四月七日

軍は右計畫に基き攻撃を準備中なりしが軍參謀長は高級參謀の頑強なる攻撃反對意見竝に第二十四師團首腦部の攻撃成果に關する



悲觀的意見を慎重に再考するところあり、遇々敵の大輸送船團新に沖繩に近接しつつありとの情報ありて、參謀長先ず攻勢中止に決心し、軍司令官も亦之を採決せり。

註

軍司令官は事大小となく、軍參謀長の意見を採用せり。

大本營に對する攻勢中止の報告には、敵新銳大兵團の到着を以て其の理由とせり。

四月八日

全線激戰中なり、敵の攻撃は眞野灣街道以西に於て特に激烈にして、八五高地は彼我爭奪の中心たり。此の頃より我が精銳なる軍砲兵隊は平時の周到なる射撃準備に基き、全面的活動を開始して、敵を威壓し、隨所に敵の攻撃を阻止せり。

四月九日

神山島の敵砲兵は我が主陣地帯内部の交通遮斷擾亂射撃に任じ、猛威を振へり、軍は獨立重砲第百大隊の一部をして、長堂附近の陣地よ

陸

軍

り之が制壓に任せしめたるも、射程長大にして、效果揚らず、茲に於て國場川河谷に位置せし船舶工兵第二十六聯隊長の意見を採用し、同聯隊西岡少尉以下約五十名を以て、神山島を奇襲せしむ。西岡挺進奇襲隊は、列舟を利用し、警戒至嚴なる海面を巧に突破して、攻撃に成功。爾後三日間、同島の敵砲兵を沈黙せしめたり。右に策應し、海上挺進第二十六戰隊は大舉嘉手納迫地の敵船團を攻撃せし、各所に敵の反撃を受け、其の成果大ならざりき。

四月十日

敵の我が主陣地帯に對する攻撃は、全線著しく緩和せり。敵約一大隊〇八三〇津堅島に上陸す。軍は同島三六丘阜に據り、抗戰中の我が守備隊に對し、勝連半島を経て背後より敵線を突破し、軍主力に合する如く命令せり。數日後、守備隊長以下三十數名、所命の如く歸還せり。

軍は四月八日の攻勢を中止せし、大本營の出撃要望に抗し、難く申譯的に有力なる一部を以て、夜襲するに決し、概要左の如く部署せり。

軍は十二日夜有力なる一部を以て當面の敵を全線に亘り攻撃し之を紛戦に導きつつ戦果を擴大し島袋東西の線に進出す

兵力部署

一、歩兵第二十二聯隊（軍豫備とし小祿飛行場正面より抽出せられ首里東北地區に集結第六十二師團長の指揮下に入る）は其の主力は二ヶ大隊を以て宜野灣街道以東第六十二師團第一線の後方近く攻撃を準備し十二日日没と共に攻撃を開始し島袋東西の線に進出す

二、第六十二師團は第一線守備隊を以て現陸正面陣地を確保すると共に新鋭歩兵約三大隊を以て宜野灣街道以西の敵に對し攻撃を準備し十二日日没と共に攻撃を開始し島袋北谷の線に進出す師團の兵力部署の概要左の如し

歩兵第六十三旅團  
攻撃部隊

長獨立歩兵第二十三大隊長 山本少佐

獨立歩兵第二十三大隊（一部欠）

那覇海岸地區より抽出轉用す

獨立歩兵第二百七十二大隊（旅團豫備）

宜野灣街道に沿ふ地區を突進す

歩兵第六十四旅團

攻撃部隊

獨立歩兵第二百七十三大隊（旅團豫備）

西海岸に沿ふ地區を突進す

三軍砲兵隊

十二日日没と共に射撃開始専ら敵後方地帯の擾亂及交通遮斷に任ず

機密作戰日誌

幕僚會議に於て高級參謀は斯かる大規模の夜襲には絶対反對して本夜襲の必敗に終るべきを力説せるも採用せられざりき



軍司令官、參謀長は四月八日攻勢中止の關係もあり成敗遲鈍を超越し軍の名譽に賭け遮に無に攻撃を強行せんとするかに見へたり本夜襲部署に於て特に著眼せるは夜間縱深深く敵線内に侵入拂曉迄に廣地域に亘り紛戦状態を形成し以て敵をして砲撃に依る物量戦法を驅使せしめざらんとするに在りしも古今東西の夜戦の例竝に我が將兵の素質、錯雜せる地形、攻撃目標たる敵の態勢が終始浮動しあること攻撃準備日數の短少なること等より判断し理論的紛戦状態を形成し且之を利用して戦果の擴大を圖らんとする實に至難と謂ふべし

四月十一日

軍は和字慶、一五五高地、一四一高地、我如古、嘉敷北側地隙の線を保持しあり

四月十二日

諸隊は豫定の如く夜襲を實行す其の成果左の如し  
歩兵第二十二聯隊

陸軍

敵情不明、地形未熟準備不十分等の爲に先頭部隊の攻撃先ず失敗に歸し聯隊主力は戦闘加入に至らずして終る

註 高級參謀は攻撃失敗明瞭なるに依り當初より攻撃の終末斯くの如くなり損害極力少からんことを希望せり

歩兵第六十三旅團

攻撃隊長山本少佐の勇敢適切なる戦闘指揮に依り約千米の縱深に亘り敵線を突破せるも十三日拂曉後孤立無援の状態に陥り殆ど二分の一に達する損害を受け同夜主陣地内に後退せり

歩兵第六十四旅團

獨立歩兵第二百七十三大隊は大隊長以下殆ど死傷して潰滅的損害を受け夜襲は完全に失敗せり

以上の如く軍の名譽維持上發足せる無理なる夜襲は第六十二師團の新銳歩兵三ヶ大隊を犠牲とし且歩兵第二十二聯隊は損害大ならざりしと雖も緒戦より奔命に疲れたるの感ありて第六十二、第二